

強気エリートのリッサーパンダ獣人、毎朝満員電車で大型犬の極太に墮とされカントボーイの子宮を犯される

## 体験版

第1話

満員電車と、  
強気な万歳威嚇

獣人たちがひしめき合う、朝の通勤ラッシュの満員電車。

レッサーパンダの獣人ロキは、若くして営業部のエースを張る男だ。周囲の乗客を鋭い目つきで牽制しながら、自分のふさふさとした縞模様の尻尾を守るように立っていた。

（……っ、クソッ、身体が熱い……っ。よりによってこんな日に……っ）

ロキを苛立たせているのは、春先に特有の発情期。しかもロキは、男の身体でありながらちんぽが一切なく、女性器だけを

持つ「カントボーイ」だった。男に生まれながら、股のあいだにはおまんこしかない。

強気でプライドの高いロキにとって、自分の意志と関係なく股間から甘い汁を垂れ流してしまうこの時期は、屈辱以外の何物でもない。今もズボンの下では、真っ赤に充血した処女まんこがドクドクと脈打ち、下着をぐっしりと汚していた。

（早く会社に着いて、薬を飲まないと……っ）

ガタンッ！

電車が大きく揺れた瞬間、ロキの背中に巨大で分厚い壁のようなものぐ押し付けられた。

「……ッ、おい！どこ見てんだ、離れろ！」

すぐさま強気な声で振り返り、相手を睨みつける。

そこに立っていたのは、人間の大人を優に超える巨体と、ライオンのような立派なたてがみを持つ大型犬、チベタン・マステイフの獣人・バスクだった。

「……おい、小動物。さつきから随分と、甘ったるくてエロい匂いを撒き散らしてんじゃねエか」

頭上から降ってきた重低音に、ロキの丸い耳がピンツと跳ね上がる。

「はあ！？お前、俺の匂い嗅いでんのか？気持ち悪い。さつきと離れろって言ってるんだよ！」

「強気な口利くじゃねエか。……だが、お前、男のくせに股間から発情したメスのまん汁の匂いがプンプンしてんぞ」

「——ッ！？」

最大の秘密をあっさり言い当てられ、ロキの肩がビクンツと震えた。しかし、エリートのプライドが彼を奮い立たせる。

「ふ、ふざけるなっ！俺は男だ！これ以上変なこと言ったら、次の駅で駅員に突き出してやるからな！」

ロキはバスクを威圧しようと、レッサーパンダ最大の防衛本能である威嚇のポーズをとった。

——両手を高く上にピンと挙げ、身体を大きく見せる、いわゆる万歳のポーズである。

本人は必死に睨みつけ、最高に威圧感を出しているつもりだった。しかし、それはレッサーパンダの悲しい習性。周囲から見れば、ただ両手を挙げてお腹と股間を無防備にさらしている、愛嬌たつぷりのポーズにしかないのだ。

「ハッ……なんだお前。喧嘩売ってきいて、両手挙げて無防備にバンザイしてんのか？『どうぞ俺の身体を好きに触ってく



ださい』って誘ってんのかよ」

「なっ！？ちがつ……！これはお前を威嚇して……んあゝ  
ッ！？」

両手を挙げてしまったせいで、ロキの胸と股間はバスクの巨  
大な手の前に完全にひらかれてしまった。

バスクの太い指が、スーツのズボンの布地ごと、ロキの割れ  
目をつウツと縦に強くなぞり上げる。

「ひゃあッ！♡い、痛っ、あッ、やめろっ……！触るな  
っ……でもっ、あッアアッ！♡」

「威嚇してるとか偉そうなこと言いながら、俺の指にすげエ勢  
いでまん汁こすりつけてきてんじやねエか。口だけは強気ない  
んらんパンダだなア」

グチュッ♡ズリュッ♡

バスクの大きな指が、ズボン越しに充血してパンパンに勃起  
上がっている敏感なクリトリスを、ぐりっ♡と強めに押し潰し

た。

「んぎいいッ！♡だめっ、そこっ、そんな強くっ、あっ、あゝアアッ！♡ふざけんなっ、電車の中だぞっ♡」

「大型犬の腕力、なめんなよ。お前のその生意気な口が叩けなくなるくらい、ズボンの上からクリちんぽこねまわしてやる」

クニクニッ♡ズジュウウッ！♡

満員電車の圧倒的な密着感。逃げたくても、両手を挙げた姿勢のままバスクの巨体に壁ドンされるように固定され、身動き

が取れない。常時発情ぎみで過敏なカントボーイの身体にとつて、強引な部位責めは限界を優に超える快感だった。

「いやっ、やめろっ……！おれはっ、エリートでっ……んああっ！♡指っ、指きもちいっ……あゝッ！♡」

「ハッ、バンザイしたまま、俺の手のひらに勝手に腰こすりつけてきてんじやねエか。強気な顔がよだれと涙でぐしやぐしやだぜ？」

ズチュウウウツ！♡

バスクのもう片方の指が、布地ごとおまんこの入口の奥へとズチュンツ♡と食い込み、お腹側の感じる肉壁をごりごりつ♡と布越しにえぐり上げた。

「んひいいいッ！♡いぐっ、おれっ、こんな男につ、痴漢されてっ、いぐううッ！♡♡」

ビクビクと縞模様の尻尾を震わせ、ロキは強気な顔を完全に崩して両手を挙げたまま、ズボンの中に大量の潮をしぶかせ、強烈な絶頂を迎えた。

しぶいた熱い潮が、バスクの手を布越しにぐっしよりと濡らす。

「……ハアッ。すげエ潮だ。口では反抗しながら、完全に痴漢の快感にいき狂いやがったな」

絶頂の余韻でガクガクと震えるロキの耳元で、バスクが低くささやく。

「だが、俺たち犬科の発情は……こんな服の上からの指先だけで終わらねえんだわ。次の駅のトイレで、その生意気なプラ

イドごと、おまんこの奥までたっぷり俺の精液でへし折ってやるよ」

「え……っ？あゝっ……！？」

満員電車というスリルと、圧倒的な力の差への恐怖、そして未知なる雄のちんぽの大きさへの期待に、ロキの小さな子宮がきゅん♡と切なく鳴った――。

# 体験版はここまで

これは、まだ入口です。

この先で、すべてが変わります。

選択も、関係も、そして——結果も。

知らないまままで終わるか、

それとも、最後まで見届けるか。

答えは、本編にあります。